



TITLE:

世界石[炭]鑛業に就て

AUTHOR(S):

石川, 成章

CITATION:

石川, 成章. 世界石[炭]鑛業に就て. 地球 1924, 1(2): 164-169

ISSUE DATE:

1924-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182640>

RIGHT:

世界石炭鑛業に就て

石川成章

世界の石炭鑛業は彼の大戦亂の影響を受けたると甚しく、大正十年(西曆千九百二十一年)の世界總産額は、其前年(千九百二十年)に比し約二億噸の減産にして、十二年前即ち千九百〇九年の程度に降れり、其主原因は價格の低落に在ること勿論なりといへども、大正十年四月より六月に及べる同盟罷工と一般工業界の沈滞亦其主因たらずんばあらず、今大正十年に於ける世界主要産石炭國に於ける石炭産額を表示すれば左の如し、(Mineral Industry 1922)に據る。

北米合衆國

有煙炭 三九二,〇〇〇,〇〇〇佛噸
無煙炭 七四〇,〇〇〇同

獨逸國

石炭 一四,六〇〇,〇〇〇同
褐炭 二,三〇一,〇〇〇同

英吉利國
佛蘭西國

石炭 一六,九二〇,〇〇〇同
石炭 二八,二四〇,八七〇同
褐炭 七五,六〇八同

ツエクスロ
ザアキア國

石炭 二,六四八,三九〇同

ベルギー國

褐炭 二,〇五七,二〇〇同

日本國

石炭 二,八七二,一六〇同

南部アフリ
カ合衆國

石炭 二七,〇〇〇,〇〇〇同

オーストラリア

石炭 一〇,三二六,八六〇同

世界總産額

石炭 一三〇,七三三,八四〇同

前記諸國中佛蘭西と獨逸とは前年よりも増産せり、即ち佛國は戦亂中に破壊せられたる鑛山を整理し着々復興事業の進捗せるを示せり、即

ち千九百十九年には、産額二千二百萬噸に過ぎざりしが翌千九百二十年には二千五百萬噸に増加し、千九百二十一年には殆んど二千九百萬噸に達せり、然れ共戦争前なる千九百十三年の程度に達せんには尙千二百萬噸の増産を要す、獨逸も有煙炭の産額は千九百二十年に比し千九百二十一年には増加したれども尙戦前に比すれば遙かに下れり只褐炭の産額は千九百二十一年に於て從來の最高額に達せり。

北米合衆國の石炭産額は世界總産額の約四割に當り戦前に比し割合は高けれども尙千九百十六年以來の最低額なり、其產出石炭の約九割四分は國內にて消費せられ、其第一消費者は鐵道にして、諸工業之に次がり、工業中にて最も大なる石炭消費者は製鐵工業なりとす、是等諸工業の石炭需要が千九百二十一年には二割四分の激減を示せり、是は實に著大なる減少にして、彼の千八百七十三年に於ける大恐慌に於てすら需要の減少額は一割一分六厘に過ぎざりしを想へば、前記の減退は激甚なりといふべし。

獨乙國は大戦前には石炭輸出國にして年々約四千四百萬噸の石炭を國外に輸出したるが戦後は形勢一變し其産額は國內の需要を充たすに足らず、英國等より、石炭の供給を仰がり、千九百二十一年に於て、一月より九月迄英國より約四十萬噸の輸入を受け九月以後も約二十萬噸輸入したるが、尙石炭の缺乏を告げ、諸工業は其影響を免れざりき、然れ共他面に於て近年褐炭の利用法を講究し、其産額亦著しく増加せり、即ち千九百二十年には一一一、八八〇、〇〇〇佛噸なりしが翌二十一年には一二三、〇一一、〇〇〇佛噸に増加せり（ザール、バラチネート、アルサス、ロレーンはこの中に産入せず）、コークスの産額も亦年々増加の趨勢を示せり、千九百二十年には二五、一七七、〇〇〇佛噸なりしが、翌二十一年には二七、九二二、〇〇〇佛噸に上れり、英吉國に於ては千九百二十一年中鑛業を爲したるは、實際三十九週間に過ぎずして一週間の平均産炭額は四、二〇〇、〇〇〇佛噸に過ぎず其結果同年に於て三百四十萬噸の石炭輸入を見

たり、是從業員同盟罷工の影響にして、採鑛夫一人當り採炭能率は最近四十年間殆んど減退の一方なり、即ち千八百八十二年より千八百九十二年に至る十年間は、採鑛夫一人當り一ケ年の採炭額二百九十七噸なりしが、千九百二十年には僅に百八十四噸に減せり。

市場に於ける石炭の價格は、尙甚しく低落せざりしが獨逸より補償石炭が市場に亂入したると、北米合衆國より歐洲に石炭を輸送したることにより、炭價頓に下落し、之に反し生産費は戰前に比し昂騰せるを以て、石炭業者は事業經營困難と爲れり。

佛蘭西國に於ては千九百廿一年石炭產額中五、三六五、七一二佛噸は大戰中に大破壊を受けたる鑛山よりの產出額にして、同國民が如何に銳意産業の恢復に努力せるか、又其效果の如何に顯著なるかを卜知するに足る。

千九百二十一年中佛國に輸入したる石炭額は一七、六六一、〇〇〇佛噸、コークス、三、二五〇、〇〇〇佛噸にして同年中石炭輸出額二、三〇〇、

〇〇〇佛噸なりき。

佛國は大戰前に於ては國內產出の石炭のみにては到底國內の需要を充たすに足らず、石炭輸入國なりしが、戰後は國內の需要を充たして、尙餘あるに至り、戰前の獨逸と全然其位置を交換したる狀況と爲れり。

ベルギーに於ける千九百二十年石炭の產額は二二、三八八、七七〇佛噸、千九百廿一年は、二一、八〇七、一六〇佛噸にして、約六十萬噸減產せり、千九百廿一年に於ける石炭の消費額は一ケ月平均二二五、〇〇〇佛噸にして、產出額の約一割二分五厘に過ぎざりき、然れ共後半季に入り、ルクセンブルグ及びロレーンに於ける鐵熔鑛爐の石炭需要頓に増加し、ベルギーのコークス市場は生氣を恢復し貯藏高を減せり。

奧太利に於ては千九百廿一年中石炭及び褐炭の產額二、六〇〇、〇〇〇佛噸に達し、前年に比し、約八分の増産を示せしが、國內の需要を充たすに足らず、主にシレシアより石炭の供給を仰げり、ツェコスロヴァキア、及び獨逸に於て

石炭の産額漸次増加の趨勢なるを以て、今後其供給を受けることを得べし。

ツエコスロヴァキアは千九百廿一年中有煙炭、褐炭の産額共に増加し、有煙炭一、六四八、三九九佛噸、褐炭二一、〇五〇、七一二佛噸、合計三二、六九九、一一一を産出し、前年に比し約百六十萬佛噸を増産せり、褐炭は、主としてボヘミアの西北部に産し、大部分エルベ川の水運により獨逸に輸送せらる。

匈牙利は戰前即ち千九百十三年に於て既に約一千萬佛噸の石炭を産出せしが戰争によりて一時頓挫し其後年々約五十萬噸づゝ増産し、千九百廿一年頃は七十七の炭山從業中にして産額急速に増加せり、千九百廿一年の産額は約六百萬噸に達せるも、尙戰前の盛況に及ばず、匈牙利の褐炭は硫黄分に富み汽關用には適せざれ共、多量の「タール」を含有し、化學工業用には重要なを以て、是によりて電力を起し、化學工業の一大發展を企畫中なり。

露西亞に於て主なる石炭埋藏地はアゾフ海

の東北端の北に位せるドーネツ盆地なりとす、（この地方は鐵の富鑛の産地クリボイログに接近せり）、ドーネツに次ぐはウラル地方にして無煙炭を産し、モスクワ盆地よりは褐炭を産す、西部シベリアなるクツネトスキー盆地及びツエレムコボー地方は石炭埋藏地廣く探掘容易なれども、開發後日尙淺く、産額多からず、要之露國の石炭鑛業は近年着々改善せられ、發達の機運に向へるも、船腹の不足は實に重大なる障礙にして、前記ドーネツ地方に於て、探掘せられたる石炭の大部分は蓄積せられ、千九百廿一年の末には、貯炭漸次増加して、七八、六〇〇、〇〇〇ブードに上れり（一ブードは我四貫三百八十二匁餘に當る）ポーランドに於ける石炭の産額は（上部シレシアのポーランドに屬する部分を除く）戰後漸次増加し、千九百廿一年には、七、五七〇、〇〇〇佛噸に達し、前年に比し約六分一の増加なるが、尙戰前なる千九百十三年の産額に比すれば八割四分四厘に當れり、褐炭の産額も千九百二十年には二四八、四七七佛噸なり

しが翌二十一年には二七〇、四一五佛噸と爲れり、この産額は千九百十三年よりは五分二多し伊太利は石炭に乏しき國にして、毎年佛國等より供給を仰げり、千九百廿一年國內の産額は僅に一、〇一九、七〇〇佛噸に過ぎず、前年に比し約五十五萬佛噸の減産なり、斯く石炭に乏しきを以て技術者は褐炭又は水力の利用に腐心せり。

英領加奈太に於て、主に石炭を産出する地方は、アルバータにして、ノバスコシア、英領コロムビア之に次ぎ、サスカッチャワン、ニウブランズウィック更に之に次げり、千九百廿一年の總産額は約一千五百萬佛噸にして、前年の八割八分に當れり。

英領印度に於ける千九百廿一年の産炭額は一八、三五八、九三四英噸にして、其中ビハール及びオリッサ地方の産額一二、九六四、六五九噸、ベンゴール州の産額四、二五九、六四二噸なり、印度の石炭鑛業は前途有望にして産額逐年増加すべし。

南部アフリカ聯邦國の石炭産額は千九百廿年一〇、四〇八、四九七佛噸、千九百廿一年、一〇、三三一、八八六佛噸にして、勞働爭議の爲め減産せり、千九百廿一年國外輸出額は一、七九五、〇九三佛噸にして、前年よりも増加せり、稼行中の石炭鑛山七十六中、フランスバールに四十一ナタルに二十七、オレンジフリーステートに三ケーブコロニーに五あり、ドランスバール内に最も多く石炭を産するはミッデルブルグ地方にして、スプリングス、ブラクバン地方、ヴェリニギング地方之に次げり、ナタルの石炭鑛業はタンビー地方のニウカッスルを中心とし、無煙炭にして南阿聯邦國中最良の石炭を産出せり、要之南阿の石炭鑛業は有望にして、漸次著しき發達を爲すべし。

大正九年(千九百廿年)十年に於ける本邦石炭鑛業の狀況を參照すれば大正九年の出炭額は三〇、八一九、八九八佛噸、同十年二六、三二〇、六一七佛噸にして四百六十萬噸を減じ、石炭鑛業は依然不況を持続せり、依りて大正十年四月九

州・北海道・常磐・地方の炭鑛業者は、出炭の制限を協定實行せり、大正九年に於ける平均一ヶ月の出炭額は二、五六八、〇〇〇佛噸なりしが

翌大正十年には平均月額約四十五萬佛噸を減せり。(完)

紀伊日高郡南部町堺の洪積統

中村新太郎
黑田德米



南部町堺洪積統

紀伊國田邊南部町ミナトの間には下部鮮新統(中新統とも思へるが横山博士の新しい研究によると鮮新統なりとの事である)の基底を爲せる角礫狀礫岩が廣く發育して居る、此の礫岩上に不整合に新しき地層が小區域に點在して居つて海岸に沿うて海拔二十米突の海岸段丘を形成して居る、其の一は南部町の南方約二十八町なる堺の海岸路傍に西南面した斷崖に露出して居る、海面から上に約六米突半は殆んど水平に位して居る下部鮮新統の角礫狀礫岩がある、此の上を